

# 「武士関係資料」再論

A Re-Examination of Samurai-Related Materials  
KOJIMA Michiro

小島道裕

## はじめに

武士とは何か、という問題を資料から考えるには、武士関係資料にはどのようなものがあるのか、言い方を変えればどのような資料を武士関係資料として扱うことができるか、という考察が欠かせないであろう。

この点について筆者は、本共同研究「中近世における武士と武家の資料論的研究」の前提となった共同研究「武士関係資料の総合化」<sup>(1)</sup>において整理を試みた。<sup>(2)</sup>しかしその後、本共同研究およびその成果としての企画展示「武士とはなにか」<sup>(3)</sup>の準備に加わる中で、不十分な点があったことに気づいたため、それを修正する形で考察を進めてみたい。

## 一、武士関係資料の四区分

はじめに、すでに行なった整理を述べておくと、第1図に示したように、武士自身が関わったものか他者が関わったものか、という軸と、同時代か後世か、という軸の二つの指標によって、四つに区分することが

できると考えた。

まず考えられるのは、左上の「自己・同時代」、すなわち武士自身が、さまざまな営みの中で実際に関わった資料である。ここで注意が必要なのは、特定の事物、例えば、甲冑や刀のような、一見武士の資料に見えるものも、実際は、武士のみが用いる武士固有の物ではないため、物の種類として絶対的に武士の物と言える物はほとんどなく、「武士の資料」であるかどうかは、武士との関係性で決まる、ということである。

「関係性」を具体的に言えば、まず武士自身が作ったものの、例えば武士が発給した文書のような「制作資料」(A)がある。そして、実際はこちらの方がはるかに多いが、武士以外の人間が作ったが、武士が使ったもの、例えば武器武具などの「使用資料」(B)がある。肖像画のようなイメージを描いた「表象資料」(C)も、武士が自身について描いた(描かせた)ものであれば、ここに入れることができる。

そして、これらの「同時代・自己」の資料は、時間が経つと、あるものはそのまま家に残されて伝世資料となり、あるものは廃棄されたり譲

渡されたりして、「他者・後世」の資料になっていく。

このように、A 武士が作ったもの、B 使ったものについては、当然はじめは同時代のものであり、それが時間が経つにつれて、家などの武士内部に留まるか、そこから外に出るか、という変化しないわけだが、ところがC 武士を描いたものについては、必ずしも武士自身が関わっていないでも成立することになる。第1図で言えば、「他者」の欄でも「武家関係資料」は作られ伝えられていくことが可能である。

具体的に言うと、「他者・同時代」の資料としては、武士を描いた絵は、武家でない他者が描くこともでき、「同時代」をやや広く取るなら、絵巻、屏風絵などの資料に実際に見ることができ。これを便宜的に「C2」とした。そして、後世からも、過去の武士を描くことや、制度上の武士という存在自体がなくなっても、それを描くことはできる。近世以降の武者絵からマンガに至る大衆的な絵画や、映画、祭礼、歴史展示など、さまざまな方法で武士は表象され続けてきた。これらの「他者・後世」の表象資料を、「C3」とした。

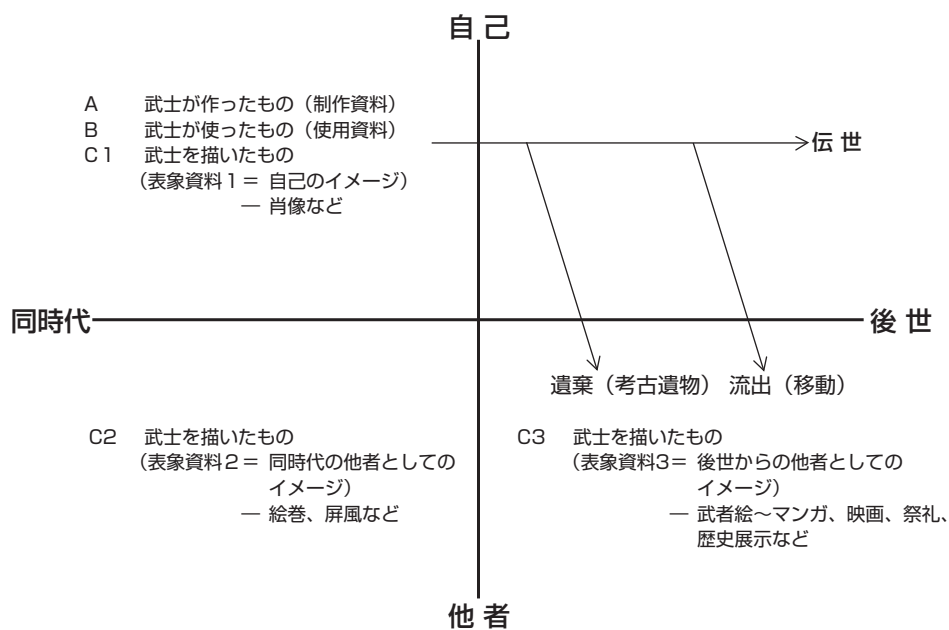
以上が、前稿で述べたところである。

## 二、「自己・後世」の資料

しかし、この表では不十分な点がいくつかある。

まず、C 表象資料だが、右上の「自己・後世」という欄は、一種の自己矛盾になるので、論理的に資料は存在しないと考え、「C4」は作らなかった。

ところが、展示の過程で、実はここに分類してこそ意味が明確になる資料が存在し、武士と武家の意味を考える上で重要であることに気づいた。以下、今回の企画展示で取り上げた資料の中から、いくつかの例を挙げてこの問題を考えてみたい。



第1図 「武士関係資料」の区分案（旧版）

### 本多作左衛門像

国立歴史民俗博物館が所蔵する「旗本本多家資料」の「本多作左衛門像」<sup>(4)</sup>（写真1）を取り上げてみたい。本多家は徳川氏の譜代の家臣であり、ここに描かれている本多作左衛門重次は、清康、広忠、家康の三代に仕え、慶長元年（一五九六）に没した。武勇の誉れ高く、「鬼作左」

の異名をとったという。旗本本多家は、この本多作左衛門重次の子、成重に始まる丸岡藩本多家の分家である。

絵の上部には、重次から十世の子孫に当たる本家筋の重賀が書いた寛政七年（一七九五）の識語があり、重次の二百年忌に際して作られたことがわかる。国立歴史民俗博物館が所蔵するものは、色彩は注記のみで着色がされておらず、それをさらに写したものと思われる。先祖を同じくする一族が、先祖についての画像を作成し、共有しているのである。<sup>(5)</sup>

このように、この肖像は、同時代に描かれた物ではなく、家の元祖に当たる人物について、はるか後年に作られたものであり、作られた時点で言えば「後世」のものだが、しかし作ったのは「他者」ではない。自らの家の出発点となる人物を、家の存在を証明し保証するものとして描いているのであり、自らの存在と不可分な、その意味で「自己」そのものと言える。家のレベルで考えれば、過去に遡って自己を描く行為はあり得るのであり、一つの資料ジャンルと見なすことができる。



写真1 本多作左衛門像（本館蔵）

#### 徳川家康像（霊夢像）

このような、家の先祖を後世に描くという行為は、他にもかなり認められるものと思われるが、その一つに徳川家康像がある。徳川家内部で多くの画像が作られているが、興味深いものに、徳川家光が狩野探幽に描かせた一連の「霊夢像」がある。家康を崇敬した家光が、夢に現われた家康のさまざまな姿を描かせたもので、国立歴史民俗博物館にも、正保三年（一六四六）一二月二五日の裏書きがある一本（写真2）が所蔵されている。<sup>(7)</sup>

自らの延長、自らの存在を保証するものとしての先祖像の端的な例だが、さらに、これらの家康像と同様のものに、単独の家康像ではなく、家康から金扇に乗せた丹頂鶴を家光が受け取る絵と、それと一具のものとして制作された家光自身の像があり、自らを家康と一心同体とみなした家光の意識を表現したものと指摘されている。<sup>(8)</sup>

まさに、自己としての祖先を描いたものであることが理解される。



写真2 徳川家康像（本館蔵）

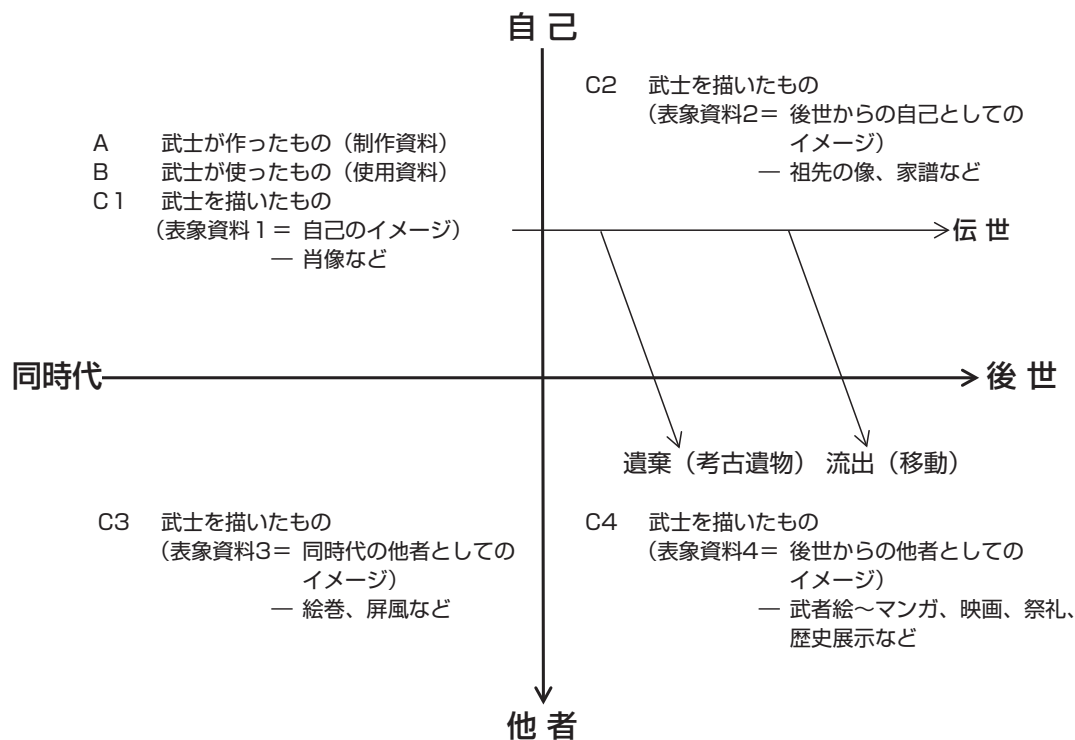
## 川中島合戦図屏風

もう一つ絵画資料で例を挙げると、「川中島合戦図屏風」(和歌山県立博物館蔵)がある。紀州藩に仕えた越後流軍学者である宇佐美定祐が著わした『北越軍記』の内容と一致する描写も多いことから、紀州藩主徳川頼宣が定祐を監修者として描かせたものと考えられている。興味深いのは、画中に上杉謙信の軍師とされる「宇佐美駿河守(定行)」の活躍する姿が描かれていることで、実際は架空の存在と考えられているこの「先祖」の姿を、宇佐美定祐が創作して描かせた、と言うことができる。<sup>(9)</sup>過去における「自己」の姿を創出することも行ないうるわけで、「自己・後世」の資料が存在することの意味をさらに明確に示していると言える。

## 大和三位入道宗恕家乗

絵画資料以外でも、「後世・自己」に区分すべき資料は存在する。これも展示した資料の一つだが、「大和三位宗恕入道家乗」<sup>(10)</sup>は、軍配に関する故実と共に、室町幕府奉公衆であった大和家の宗恕(晴完)が、足利尊氏に仕えて以来の先祖と自己に関する功績を書き綴っている。しかし、それは必ずしも史実とは見なしがたく、大和家の「さぬ」という娘が尊氏の御台になり義詮の母となったなど、宗恕による創作ではないかと思われるような記述もかなり見られる。おそらく、室町幕府滅亡後に再仕官の道を探る過程で、自らの家の歴史を粉飾したのでないかと思われるが、このような家譜の類は、往々にしてそのような部分を持っていると思われる。

以上の様に、先に示した武士関係資料の区分図(第1図)には、「自己・後世」の欄にも、「C表象資料」を加える必要があったわけである。数字については、C1(自己・同時代)の延長として、「自己・後世」をC2とし、「他者」による表象を、C3・C4としたい(第2図)。



第2図 「武士関係資料」の区分案(修正版)



### 三、「他者・後世」資料の増殖

もう一つ第1図に改善を加えたいのは、右下の、「他者・後世」の欄である。ここには、先述のように、後の時代から見た、他者としての過去の武士についてのイメージが入るが、この欄が他の欄と異なるのは、武士という存在が実体としてなくなっても、この欄の資料は増え続けることができる、ということである。

もっとも、武士に関する関心がなくなり、武士をイメージしたものが何も作られなければ増殖は止まるのだが、現在においては、むしろ様々な形で武士のイメージ、そして日本人を「サムライ」として表象する物や思考様式は、内外を問わずとどまる様子はなく、むしろ定着し際限なく増殖していく勢いである。

このことについて、区分図の上でも表現する必要がある、と指摘を受けていたため、「後世」と「他者」の方向に矢印を付けて、それがこの先も延びていくことを表現してみた(第2図)。実際にこの二方向に線を延ばして図の右下部分を大きく書けば、この部分が肥大化していることも示せるだろう。

### 四、「過去における同時代」と「同時代における過去」の問題

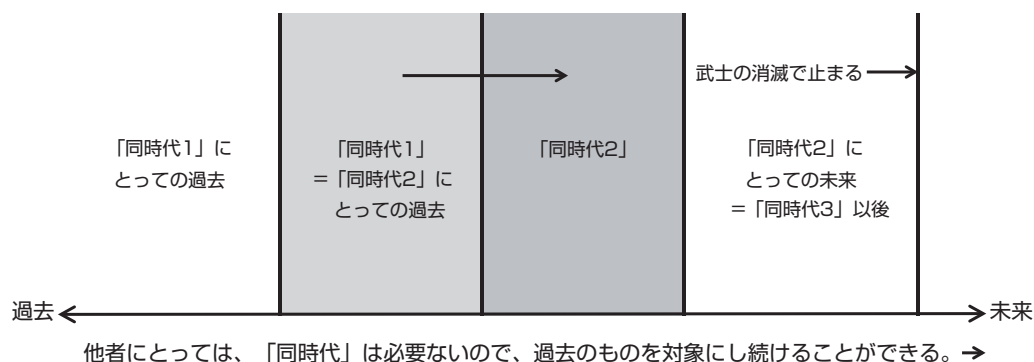
しかし、時間軸に「動き」を入れると、新たな問題が生じてくる。過去の部分についても、それを考慮する必要があるためである。

第1図は、基本的に、現在博物館等に収蔵されている資料の区分をイメージして作られているため、静止した状態で、特に武士については、すでに存在を止めた状態で考えているのだが、当然ながら、武士が存在した時代においても、このような区分は適応しうる。その問題についても共同研究で指摘を受けていたため、多少考察してみたい。

武士が武士として存在している時代においては、「同時代」は、次の

代には過去となり、資料も「後世」に伝わった資料、という位置づけになる。そして、その次の代には、それも含んで、また「後世」の資料になる。これを繰り返す中で、資料の意味も変わっていくわけであり、そのことも考慮する必要があるのだが、第1図における「自己―他者」という縦の軸が時間に沿って動いていく、と考えるよりも、「同時代」という幅を持った部分が、「過去」と「未来」の間を動いて、「同時代」であった部分は順次「過去化」していく、と考えると分かりやすい(第3図)。

この「過去化」によって、その物は新たな意味を持つことになる。先代や、さらに遡った「元祖」等の使用した、ないし制作した物は、「同時代」においてそれを所有していることが、正統的な後継者であることの証、あるいはさらに、「源氏重



第3図 武士関係「同時代」資料の推移

代の宝剣」のように、帰属する社会全体における意味を持つことにもなってくる。そしてそれは代を重ね、継承が繰り返されるごとに新たな意味をまとうことになるから、それぞれの時代においてその物が担った意味は異なり、そして最終的に「同時代」枠が右に進む動きが止まる時、すなわち武士という存在が消滅するまで、その物の持つ「自己資料」としての意味は変化し続ける。そして、その物がこの時間軸を移動する間にまとった意味をすべて含むものとして、「資料」として固定される、ということになるだろう。

なお、この動きにおいては、「他者」の方はさして重要ではない。他者にとっては、多かれ少なかれ、過去の出来事しか書けないのであり、描く対象が存命であるかどうかはさして問題にならない。その意味で、C3とC4は連続した存在であるとも言えるし、それ故に、武士が存在しなくなった後にも増殖し続けることが可能なのである。

## おわりに

現在という時点から見ると、ひとしなみに過去の物であっても、その物の作られた事情や、それぞれの時代における意味を考えていくと、それぞれの背景に応じて、問題は必ずしも単純ではない。後世から過去を作ることもあるし、過去の物も「同時代」に生きている。それぞれの時代において、その物の持った意味に思いを巡らせてみる必要があるだろう。

そして、現在も増殖しつつある「他者・後世」の武士関係資料も、やはり考察の対象としていくべきだと思われる。先立つ共同研究「武士関係資料の総合化」においては、フランスの中世史研究者と四度におよぶシンポジウムを行ったが、フランス側は、近代以降の騎士ないし中世の表象について強い関心を持っており、それを対象としなければ、歴史は現在の社会と乖離したものになってしまう、という意識を持っているこ

とが印象的であった。前回の報告書『武士と騎士』では、その問題は課題として残さざるを得なかったが、本稿の整理が、いささか空回り気味ではあるが、今後その問題を考えていく上で、何らかの手がかりとなれば幸いである。

## 註

- (1) 人間文化研究機構連携研究「武士関係資料の総合化―比較史および異文化表象の素材として」二〇〇五～八年。
- (2) 小島「洛中洛外図屏風と描かれた公武関係―武士と『武士関係資料』のありかたをめぐる―」小島編『武士と騎士―日欧比較中近世史の研究―』思文閣出版、二〇一〇年。
- (3) 企画展示「武士とはなにか」二〇一〇年一〇月二六日～一二月二六日、国立歴史民俗博物館。図録も同館より刊行。
- (4) 資料番号H-60-9-1。
- (5) 着色画像も本家筋に存在し、(3)の企画展示図録にも収録されている。なお、この資料については、高久智広氏による図録の解説を参照した。
- (6) 江戸東京博物館企画展図録『徳川家康の肖像―江戸時代の人々の家康観―』徳川記念財団、二〇一二年。
- (7) 資料番号H-17。他に徳川記念財団、日光山輪王寺所蔵の物があり、前掲図録(6)は、一二点を紹介している。
- (8) 松島仁「祖父家康との一体化を夢想する家光―家康・家光対面の『東照大権現霊夢像』と『徳川家光像』」前掲図録(6)。
- (9) 企画展示「武士とはなにか」図録の前嶋敏氏による解説を参照し、同氏から御教示を得た。この屏風と軍学者宇佐美定祐については、和歌山県立博物館の高橋修氏も詳しい解説を行っている(『合戦図屏風のなかの『謙信』』池享・矢田俊文編『定本上杉謙信』高志書院、二〇〇〇年、他)。
- (10) 国立歴史民俗博物館蔵、資料番号H-799。全文の紹介は、『国立歴史民俗博物館研究報告』(号数未定、二〇一四年三月刊行予定)に別稿を用意している。

「大和三位入道宗恕家乗」と大和宗恕については、古川元也氏による研究があり(『故実家大和宗恕管見』『年報三田中世史研究』三、一九九六年)参照した。

(国立歴史民俗博物館研究部)

(二〇一三年一月二五日受付、二〇一三年三月二六日審査終了)